

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

太宰治の斜陽館

リフォーム業界に長くいると、既存の建物を見るとすぐに「改修すれば、こうなるのになあ……」とリフォーム後のイメージを膨らませる。ただしそれは時と場合によると思う。

先日、太宰治の生家を訪ねた。奥州・北陸の豪農の妻は新潟の伊藤家をはじめ、各所で驚かされるのだが、小説で身近に感じている太宰治の青森の生家がここまで立派な家だとは思わなかった。

貴族院議員をしていた父の影響で、日本古来の立派な建物というだけではなく、近代日本の成長をいち早く取り入れ、内部は半分以上が洋館づくりとなっていた。モザイクで組まれた天井の見事に心引かれながら、この建物は「このままがいい！」と強く感じた。長男至上主義の時代の六男坊である太宰治は、大変な問題児だった。東京で問題を起こすたびに、家名を汚すと侍従が飛んできて後処理をする。そんな問題児の書いた小説の題名「斜陽」が、今やこの立派な生家を代表する名前「斜陽館」になっているのが面白い。

長男だけが入れた部屋、長男だけが食事できた場所。そんなしきたりの中で、六男坊はどう暮らしていたのだろうか？

いろいろと想像を膨らませるのだが、そのためには昔のものが昔のままであることが一番いい。

築三〇年、四〇年を超える住宅に住んでいる方々が、建替えずにいるのも、この人生の歴史を振り返る空間をゼロにしたくないという思いだろう。良かったことは思い出すことで心を再び豊かにしてくれ、悪かったこともそれを取り越えた自分を振り返り、今いる自分に納得できる。

思い出の蓄積は、どれも貴重だ。ただし残念ながら、日々暮らす我が家は自然劣化で済まずわけにはいかない。何かしらの手を加えながら住み続けることになるのだが、背比べ傷が付いた柱を残しながらのリフォームや、玄関の式台を再生してのリフォームがあるのもうなずける。

古民家再生がブームを呼んでいる。若い人たちの中



斜陽館

でも、日本家屋の木の持つ重厚な、そして温かみのあるやすらぎを取り入れようと、古い家を譲り受け再生していく。再生事業は楽しいものだ。ただ汚い、ただ古いと思われたものが、少し手を加えるだけで見るとよみがえる。たいへんではあるが、それを上回るスケールの大きいわくわく感に満ちて仕事が進む。

東京大学赤門近くに、求道学舎という明治三五年に新築された建物が、今回コーポティブハウス（共同で注文主となり、住宅を建設する方法）の集合住宅として再生された。木造建築だけではなく、コンクリート住宅も壊されることなく再生への道を歩み始めた。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。